

鳥ヶ岳

丹波ヨブの生涯

船越昌



鳥ヶ岳

船越
昌

結婚したら	毎月17日発売
主婦の友 ●「主婦の友」の愛読者の95%は結婚しています。「結婚したら主婦の友」のキャッチフレーズとおりです。	
若い女性の生活誌	 毎月7日発売 
赤ちゃん・子どもの服飾・育児誌	
別冊 主婦の友	年6回発行
「きものと装い」ほか	
主婦の友増刊	年4回発行

鳥ヶ岳

丹波ヨブの生涯

定価／六八〇円

発行／昭和四十七年十月九日初版

著者／船越 昌

発行者／石川数雄

発行所／株式会社主婦の友社

東京都千代田区神田駿河台一の六

郵便番号 一〇一

振替 東京一八〇番

電話 東京(03)二九四一一一一(大代表)

もし落丁、乱丁その他不良な品がありましたら、おとりかえします。お買い求めの書店か本社へお申してください。

印刷 明善印刷株式会社

まえがき

三浦綾子

旧約聖書の中に「ヨブ記」という項がある。そこには、神の意志と人間の苦難との関わりが、一大ドラマと共に追究されている。古来このヨブ記によって、どれほど多くの人が慰めと励ましを受けてきたことであらう。

ヨブは、行ない正しく、神を敬うことその比を見ない人物であった。が、ある日突如として言語に絶する災厄に見舞われる。一挙に財産を奪われ、その子女たちは、矢つぎばやにあるいは殺され、あるいは死ぬという事態が生じ、しかもヨブ自身もまた、全身膿みただれる業病に苦しむところとなる。正に苦難の典型である。

この小説「鳥ヶ岳」の主人公のモデルは野林格蔵という人であるが、この人もまた、丹波のヨブといわれたほどに、癩のために悲惨な生涯を送った人である。そしてその悲惨と苦悩に見事に打ち勝った人物である。

わたしは今までに、多くのハンセン病者の著書や歌集を読み、幾度心打たれたかわからない。生々しい体験は読む者の心を動かさずにはおかぬものである。

ところでこの「鳥ヶ岳」の著者船越昌氏は、ハンセン病者ではない。にもかかわらず、こうまで胸に迫ってくるのはなぜであらうか。わたしはこの本を、何度も何度も涙をこらえ

ながら読み終えた。そして考えた。第三者は所詮当事者とはなり得ないものである。が、この著者はあたかも自分が主人公そのものになりきっている。一体それはなぜか。

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣け」と聖書はいう。著者船越氏は、まさしくその言葉によって生きているからではないか。

氏は先に、多大な感動を与えた「ひたむきに愛を求めて」を刊行された。二児までも脳性小児マヒに冒される悲劇を体験した氏は、人間としての苦悩をつぶさになめてこられた方である。それだけに、泣く者と共に泣けるのであろう。その涙が、この著書の中の至る所に光っている。苦しむ者と共に苦しむそのうめきが、その行間から聞こえてくる。

もとよりこれは単なる小説ではない。氏の真実な信仰告白でもあるのだ。氏はこの書を書き上げるのに、幾度熱い涙を流したことであらう。幾度熱い祈りを神に捧げたことであらう。その熱涙が、熱情が、熱禱^{ねつとう}が、わたしたち読む者の胸をゆさぶらずにはおかなのだ。

人間として、苦しみ悲しみを味わった人なら、この書に感動せずにはいられないと思う。いや、全く悲しみを知らない人であっても、深い感動を呼びさまされずにはいないであらう。

わたしは、この本が一人でも多くの方に読まれることを願わずにはいられない。そして、「真の幸いは何にあるか」を発見されることを祈らずにはいられないのである。

わたしは裸で母の胎を出た
また裸でかしこに帰ろう
主が与え、主が取られるのだ
主の御名はほむべきかな

旧約聖書 ヨブ記第一章二十節

目次

稲妻	6
宣告	32
讃岐詣で	80
空蟬	115
笛の便り	132
氷柱	140
魂の琴線	181

光の受肉	200
時は満ちた	226
永遠の生命	261
胡麻の夜嵐	274
道標	307
付記 丹波ヨブ記	334
松井文弥(牧師)	
あとがき	348

稻 妻

一番鶏が、けたたましく鳴いていた。

勝造は手を握りしめ、ふとんの中で力いっぱいからだを伸ばした。かたわらで妻のきぬが、四歳になつてゐる万吉を、抱くようにして眠つてゐる。宵から蒸し暑かつたせいか、万吉はふとんをけとばし、丸まると太った足を投げ出している。着物がめくれ上がつて、腹がまる出しになつてゐた。

勝造はむくりと起き上がり、万吉の足にさわつてみた。

「冷たい。万が寝冷えでもしたら、えらいことやで」と、つぶやきながら、ふとんを胸まで引き上げてやつた。その仕草を、きぬが薄目をあげ、ちらつと見た。やおら寝返りをすると、眠りの中に引き込まれたのか、静かないびきが聞こえていた。

勝造は、ふとんを頭からかぶつた。昨夜はどうにも熟睡できなかった。からだがなんとなく疲れている。最近になつて、妻にも、両親にも言い出せぬ黒いしこりがあった。そのしこりが胸につかえ、彼を悩ませつづけているのだった。

そつと手を伸ばして、右の太ももをさわってみる。何度か妻に打ち明けようとも思つた。その心とはうらはらに、徐々に広がっていく褐色のあざを、妻に見つけられはしないか、感づかれたのではないかと思うのだった。その不安と恐れが、頭をもたげるのであつた。

昨夜は、西胡麻にしじまの安吉の家へ遊びに行った。五人の仲間と、四升ほどの酒を飲んだ。そのふつか

酔いで頭の芯がキリキリと痛む。しかも酒のうえでのいさかいが、あと味悪く思い出される。そのうえに、光蔵みつぞうの言ったことが、今も胸に突き刺さって、わだかまりが頭から離れないのだ。

酔いが回り始めたころ、光蔵がまじまじと勝造の顔を見ながら言った。

「勝さん、おまえの顔に変な色をしているところがあるで。酒を飲むまでは気がつかんだが、右あごの上が、おかしな色をとる」

勝造は、あわてて顔に手をやり、さりげなく答えた。

「きょう、田んぼで虻あぶに刺されたのや」

「おまえも、のんき者やのう。あごに虻が止まって刺していたのを気がつかんとは、ワハッハッハハ」

それから、勝造の気持ちは落ち着かなかった。飲むほどに、酔うほどにおもしろくなかった。酒が残り少なくなつた。それぞれの者が好き勝手なことをしゃべり合っているうちはよかった。

ところが、大工の辰五郎が、清太郎に小銭を貸していたのを、唐突に催促したことから、雲行きがややしくなつた。

「おい辰つあん、わしになんの恨みがあつて皆の前で赤恥をかかすんか。その話なら、ふたりだけのときにくれてもよさそうなんやないか」

目をすえ、青筋をひくひくさせながら、清太郎は辰五郎をにらみつけた。辰五郎は、酔いでまっかになつた顔を、にやりとさせた。

「清きよ、大きな口をきくな。何度おまえのおやじに知れんようにたのんだか。そのたびに、『すぐ返す。もうちょっと待ってくれ』と言つていながら、いつも知らん顔してる。貸してから一年からに

なるぞ。大きな口をきくなら、ちゃんと返してからにせい。おまえのような奴は、友だちの前で言わんと性根をいれんわい」

「やかましい。いつわしが皆の前で大きな口をきいた言うんじやい。よいかげんなことを言うな。返したらよいやろ。金が何だ。返したら文句ないやろ」

清太郎は、いきり立った。酒の酔いで理性はとくに失われている。酒のたつぷりはいった杯さかずきを、手にするが早い、辰五郎の顔に投げつけた。

「畜生、やりよったな。金を貸してやった恩も忘れやがって」

叫ぶが早いか辰五郎は、清太郎に飛びかかった。徳利はひっくり返る、茶わんは割れる。むちゃくちゃくちやの乱闘である。当家の女房や子どもが驚いて、おそるおそるのぞき見していた。気の弱い安吉は、ただおろおろするばかりだった。集まっている連中では、一番に力が強い勝造に向かつて、手を合わせた。

「勝さん、なんとか止めてくれ、頼む」

それまで腕を組んで、冷ややかに成り行きを見ていた勝造は、のっそり立ち上がった。ふたりの間に割ってはいいるが早い、双方の顔を力いっぱい殴りつけた。

「けんかするなら外でやれ。安吉の家の迷惑するのを考えてみる」

どすのきく声で言う、勝造はふたりの胸ぐらをつかんで引き立てた。何しろ村一番の強力ごうりきである。庭へ引きずりおろすと、またもやふたりを殴りつけた。ついぞ人を殴ったことはない勝造が、きょうばかりは違っていた。殴りつけることによって、胸の中のもやもやとしたものを、吐き捨てようとしたのである。

「おじやましたな安さん。おもしろくないので、一足先に帰らせてもらう。けんかしながら酒を飲

んでも、うもうない」

言い捨てると、勝造は外に出た。降るような星空だった。ふらふらする足を踏みしめながら、わが家にたどり着いた。

ほの暗いランプの明かりのもとで、きぬがつくろい物をしていた。

「あんた、えらい酔ってはるねえ」

「うん……？」

「今すぐ酔いさまに、冷たいお茶をいれますからねえ」

きぬのやさしい心づかいの茶を飲みほし、うしろめたい思いでふとんをかぶった。

それらのできごとが、あと味悪く脳裏によみがえる。けんかにならぬうちに、止めるべきであった。自分のうつぶんを晴らすため、辰五郎と清太郎を殴ったことが良心を責めるのだった。あれは仲裁ではなかった。頼まれた仲裁の責任も果たさず、逃げるようにして帰ったことが悔やまれてならない。しかしそのことよりも、光蔵が顔のあざを指摘したことが気がかりなのであった。

二番鶏が鳴いた。

万吉が目をさまさぬように気を配りながら、勝造は蚊帳かやをまくり上げ、もも引きと襦袢じゆばんを手早く着込んで、裏口から外へ出た。

朝もやがいちめんかまに立ちこめている。井戸水を汲み上げ、顔を洗った。鎌かまをとぎ終わると、もっこに棒を突き刺し、それを肩にかつぐと家の裏手にある土手道を、朝露を踏みしめながら上って行った。段々に積み重ねた田んぼの稲が、青々として美しかった。

しつとりと濡れている草を刈り倒しているうちに、ふつか酔いも去っていった。勝造の気持ち

も、知らず知らずに和んでいった。

東の山々の上が、まっかになっていた。しばらくすると、その山の上に朝焼けの太陽がぼっかりと姿を見せた。「あすは雨になるかな」つぶやきながら草を束ね、もっこに入れた。それからきょう、田の草取りを予定している田の、水を落とした。ついでに、その回りにあるわが田の、稲の育っているありさまを見て回った。

家に帰ると勝造は、牛を引き出し、敷きわらを入れた。わら束で丹念に今年三歳になる雄牛のからだをさすった。牛を畜舎に追いこんで、刈りたての草を投げ与え、食いぶりをしばらく見ていた。ブーンと鼻をつくみそ汁のかおりが、はらわたにしみる。勝造は台所に立った。

「父ちゃん」

上がりかまちから、万吉が手をさし出す。

「万、泣かんと起きたか。よしよし」

めっきり重くなった、万吉を抱き上げた。

「父ちゃん、きょうは七夕祭りやと、お祖父ちゃんが言わはったよ」

「きょうは七日盆かい。それじゃ万のために、竹を切ってきてやろうかな」

「竹を切って何にするの」

「万がよい子になるように、祭ってやるのじゃ。赤や青の紙に、天の川と書いてなあ」

朝食の用意ができる間、勝造は万吉をだっこして、楽しげに語り合っている。

紅がらぬりの、はげた箱膳が並んだ。万吉の箱膳だけは、赤く艶やかに光っている。その上にみそ汁、漬け物、塩魚の焼いたのが皿に盛ってのせてある。

「勝造、もうすぐ綿打ちが忙しなるで、早う田の草取りを済ませたいのう」

父親の亀太郎は、そう言つてせわしげにみそ汁を吹きながら吸った。

「おやじさん、大戸の田んぼに、草がぎょうさん生えていたので、水を落としたいで」
飯をかき込みながら、勝造は父親を見た。

母親のすみが、みそ汁のおかわりを入れながら言った。

「私の家はありがたい。おとなの達者そろいが四人もいてくれる。どんな仕事にしても、早う済ませることができるでなあ」

そそくさと朝食が終わった。

野良着に着替えながら、亀太郎は万吉の頭をなでた。

「万よ、お祖母ちゃんと、よい子してるす番をしてくれよ」

「お祖父ちゃん、七夕祭りしてよ」

「おおよしよし、万は七夕さまに何をお願いするかの」

「あのう、筆を買うてもろて、お祖母ちゃんに字を教えてもらう。それでお医者さんになれるように、お星さんに頼むのや」

「そうか、万はえらい子じゃ」

につこりしながら、亀太郎は孫の顔をのぞき込んだ。

「ほんとに、万はよいことを言うてくれる」

すみは嬉しそうだった。字を知らないにもかかわらず孫が信頼している。塩魚の骨を取って万吉の口に入れてやりながら、にこにこしていた。

田はよいあんばいに水が落ちていた。三人は横に並んで四つんばいになった。ナギ、ウリカワ、オモダカ、ウシノケなどの水草が生えている。それを両手でつかみ取って、泥の中に突っ込む作業である。まさに泥亀と同じである。黙々と田んぼにはいつくばっての田の草取りは、けっして楽な仕事ではない。背中を太陽が照りつける。下からは堆肥の発酵したにおいが、胸をむかつかせる。それに腰が痛い。それは苦しい重労働である。三人は黙々と何回か往復して畔に着いて、やっと腰を上げた。襦袢ももも引きも汗でべとべとに濡れていた。

「ああ、腰が痛い。暑うなったのう」

亀太郎は、だれにともなくつぶやき、畔に腰をおろした。

「ちよっと一服やろうか」

勝造も、きぬと並んで腰をおろした。

「鳥ヶ岳に雲がかかっている。勝造、きょうは夕立がやって来るか知れんのう」

「朝焼けがひどかったので雨になるやろ」

父親にうなずきながら、照りつける空を勝造はまぶしげに見上げた。

「夕立の前ですのうで、こんなに蒸し暑いのですねえ、お祖父さん万吉が七夕さんを楽しみにしているのに、雨が降ったらかわいそうですねえ」

「おてんとうさまだけは、人の力でどうにもならんわい。方には悪いけど、畑が喜ぶわい」

「ほんとにねえ」

きぬは、かぶっていた手ぬぐいを取ると、顔の汗をふきとった。

明治時代は、除草機もなければ、現代のような便利な殺草剤もない。四つんばいの方法しか、田の草取りの方法はなかった。

しばらく休んで、またもや黙々と田の草取りを始めた。雨が来るまでには、せめてこの田だけでも終わりたい。言わず語らずのうちに、三人の思いは一つであった。手は泥をかきまぜながら、勝造の心は昨夜から頭を離れない黒いわだかまりのために、重たかった。さりげなく父親と妻に打ち明けようかとも思った。しかしなんとなく、それ恐ろしい気がして打ち明けることができそうにもなかった。

太陽が真上になったころ、家の方角から万吉の呼び声がした。

「お祖父ちゃん、父ちゃん、母ちゃん」

勝造は腰を伸ばしわが家の方を振り返ってみた。牛小屋の横にわらが積んである。万吉がその上に上がって手を振っていた。勝造も手を振って応えた。手を輪にして口に当て、万吉は叫んでいた。

「昼ごはんができたよおー、早う帰ってえー」

「おきぬ、万が待っているの、一足先に帰ってやっておくれ、残りは勝造と二人で片づけてしまうで、さあ早う帰ってやれ」

「それでは、先に帰らせてもらいます」

きぬは畔に上り、小溝こみぞで手を洗った。紺襦袢かすりじゅばんの裾で手をふきながら、

「お祖父ちゃんも、あんたも、暑いので早う帰ってね。それではお先に」

「うん……」

ちらつと帰って行く、きぬのうしろ姿を見やりながら、勝造は父親とともに泥亀になった。昼を少し回ったころ、ようやく半日の予定していた仕事が終わった。

「おやじさん、先に帰っておくれ。わしは七夕の竹を切ってくるので」

勝造は半町ほど隔たっている、山のほとりの竹やぶに向かった。七夕に手ごろな竹を二本切った。あたりにだれもないのを確かめると、勝造はもも引きをすらしめた。からだをよじるようにしてうつむき、右の太もものつけ根のやや上を、じっと見つめた。

「……」息を吞むように凝視していた目をそらすと、あわててもも引きをもとに戻した。勝造は二本の竹をかつぐと、元氣なくそのかげに隠れるようにして、わが家に向かった。

「万、帰ったで」

「父ちゃん、竹切ってきてくれはったか」

「裏の軒に立てかけてある、見てみる」

皆は遅い昼食のはしを取った。

「お祖母ちゃん、この茄子なすのみそあえうまい」

心の痛みを気づかれまいとして、勝造は母の手料理をほめた。

「勝造が喜んでくれると思って作ったのや」

「おすみの料理にしては、上できやのう」

「えらいほめてくれはること、そんなに言いはると、日和ひよりが変わりますよ」

すると万吉が、けげんそうに尋ねた。

「なんで日和が変わるの。お祖母ちゃん」

「万よ、あれを見てみる。鳥ヶ岳の上にまっ黒の雲が出てきたど。お祖母ちゃんがおいしいおかずを作ってくれはったからかな」